

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:野中 栄治

所属:大分県立聾学校

記録日:2017年2月8日

キーワード:表現、読み書き支援、学習支援、学習保障、学習意欲、教科学習、家庭学習、動画・写真、作文、日記

【対象生徒の情報】

・学年

中学部 2 年生 男子生徒

・障がい名

聴覚障がい・・・聴力(裸耳)右 100dB 左 118.75dB

・障がいと困難の内容

補聴器の装用はなく、音声は使わない。第1言語は日本手話である。

文章を書くことに抵抗はないが文章を書く時、動詞や形容詞の活用、助詞の使い方が分からず悩むことがある。

手話ができない教師とは文字や絵などを使って筆談したり、身振り手振りなどを使ってコミュニケーションを図っている。しかし、日本語理解が難しい本人にとってはすべてを理解することは容易なことではない。

【活動目的】

・当初のねらい

日本語の読み書き能力を向上させる。

日本語を主体としたコミュニケーションの円滑化を図らせる。

・実施期間

2016 年 5 月～2017 年 1 月

・実施者

野中栄治

・実施者と対象生徒の関係

昨年度 担任 今年度 教科(社会)の授業担当

【活動内容と対象生徒の変化】

・対象生徒の事前の状況

文章を書く時、日本語を書くことに抵抗はないが、文章の表現や助詞の使い方をどのように書けばいいのかわからず書くことが多い。助詞が抜けていたり、間違っているときがある。

→文章の表現をたくさん書くことが必要。助詞の使い方や意味を知ることが必要。

手話が使えない教師とコミュニケーションを取る時、筆談などを使ってコミュニケーションすることはできるが、手話を使えない人とたくさん話すことは少ない。

→手話を使えない人と交流する時、手話以外のコミュニケーション方法をとることも大切であることを知る必要がある。

・活動の具体的内容

①助詞の使い方や意味を知ることができる。

→助詞の使い方や意味の内容を作ろう



「simplemind+」(有料)

動画を添付して、助詞の使い方や意味を確認することができるので、このアプリを使った。助詞の使い方や意味を理解し、自分自身を動画で手話を使って助詞の使い方や意味を話す内容を撮った。その動画を添付して、自分が考えた文章を作成することができた。

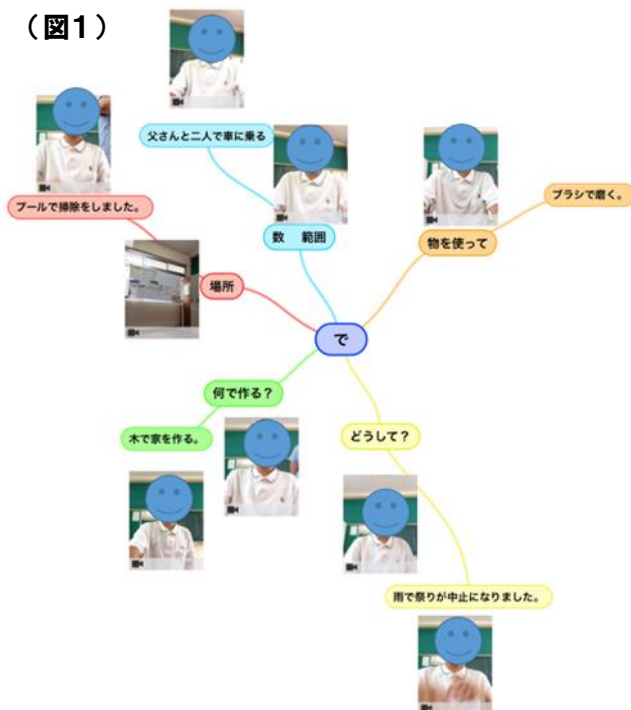
○助詞「で」の使い方

『なにでつくる』『場所』『ものをつかって』『どうして』『範囲(数)』を手話の表現で動画を撮り、作成した。(図1)

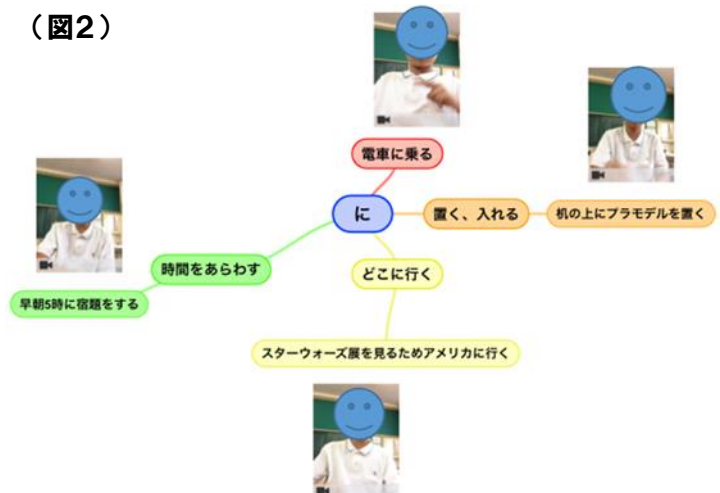
○助詞「に」の使い方

『じかんをあらわす』『一にのる』『どこに行く?』『一におく、入れる』を手話の表現で動画を撮り、作成した。(図2)

(図1)

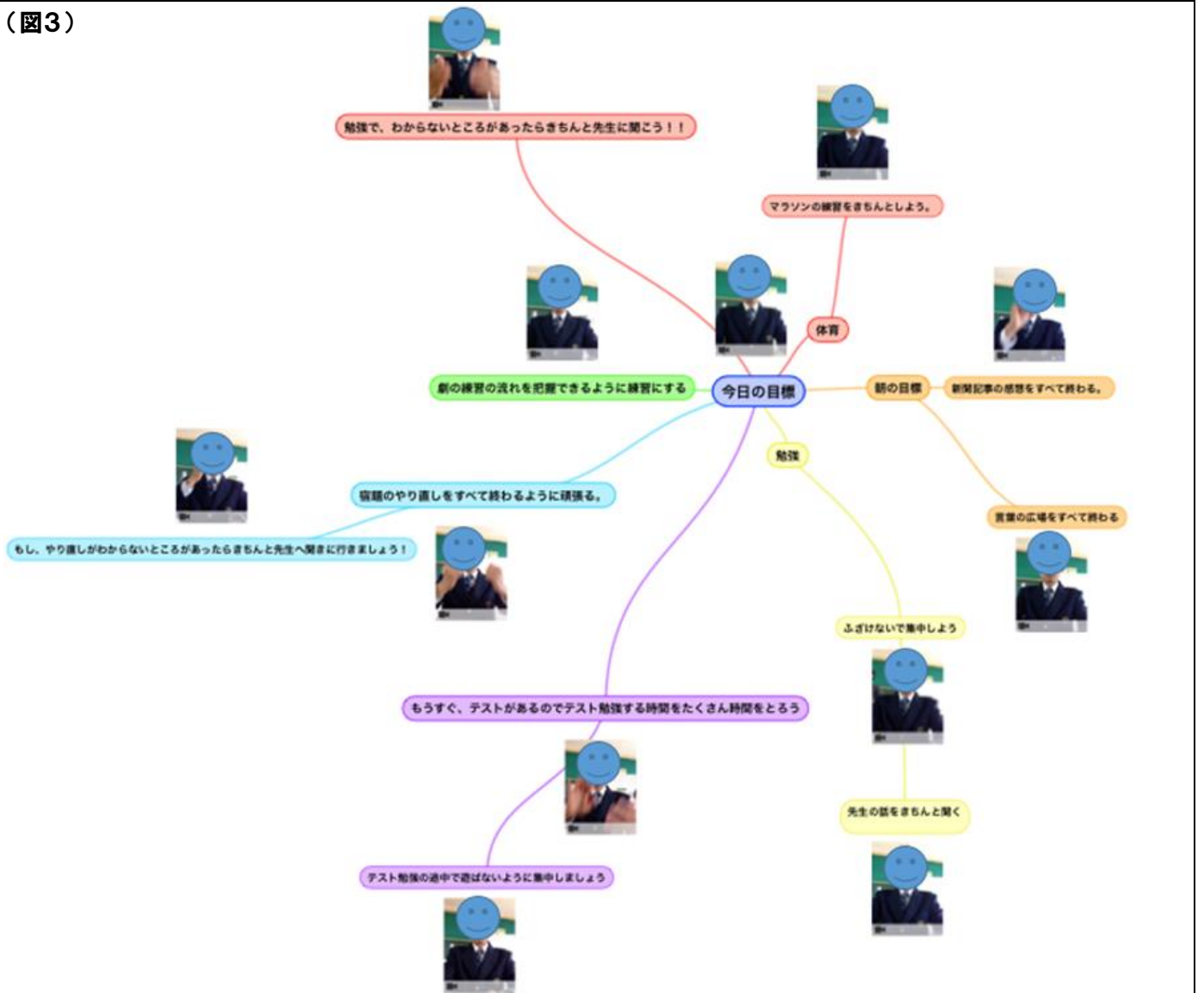


(図2)



○助詞の使い方や意味を改めて知ることができ、朝の会で決める一日の目標を黒板で書く時、助詞の使い方が合っているかどうかを考えながら書く様子が増えてきていた。(図3)

(図3)



②授業中、手話を使えない教師が話す内容を知ることができる。

→ UDトークを使って教師が話す内容を見よう



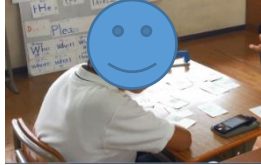
「UDトーク」

このアプリは音声入力によるアップロードが速いので、手話をまだ使えない教師の補助的手段として使った。本生徒はこのアプリがあると、教師が話す内容を理解ができて喜んでいて。しかし、話者の滑舌が悪かったり、マイクが音声を十分拾えなかった時は誤変換や誤表記が多く、本生徒が『言いたい内容は、これだろうか？』間違っているみたいだが、どんな内容だろうか？』と思っても、その都度、教師へ確認することはあまりなかった。内容が分からないときは、遠慮無く教師へ質問するように指導した。

本生徒は教師の顔を見ないで、手元にある iPhone の画面を下向きで見るが多かった。教師は iPhone の画面が小さいため、生徒が見ている iPhone の画面に、自分の話していることがきちんと表記されているか確認することができなかった。(図4)

そこで、教師は iPhone の画面を、本生徒は教師の顔を見ることができるよう、AppleTV と液晶モニターを使うことにし、iPhone の画面と生徒・教師の視線が同一線上になるようにした。教師は話した内容の確認することができ、本生徒も変換の間違いに気づき、教師へ質問することができるようになった。(図5)

(図4)



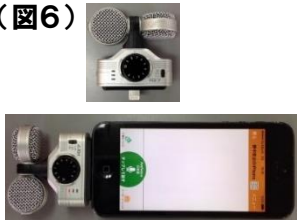
(図5)



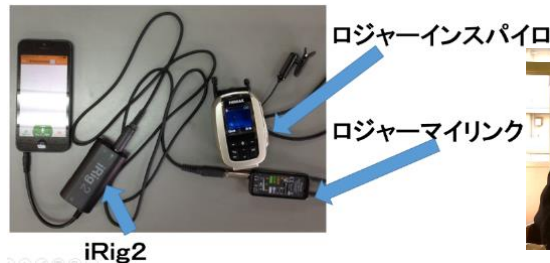
iPhone 本体だけでは音声を拾いにくかったため、外部マイク(ZOOM iQ7)をつけた。iPhone 本体よりも音声を拾いやすくなったが、教師が常に iPhone を所持しておく必要があった。教師が iPhone を机の上に置き、そこから離れてしまうと、どうしても音声を拾いにくく、拾った音声しか変換しないため、変換内容が少なくなり、本生徒も授業の内容を把握することが難しく、集中できない状態になってしまった。(図6)

教師が iPhone を所持せずに音声を拾える方法を改めて探してみたところ、補聴器を扱うフォナック社のロジャーという機器と iRig2 を一緒に接続する方法があった。教師は iPhone を机の上に置いたまま、ロジャーインスパイロのマイクを首から下げることでマイクが音声を拾うことができ、本生徒は今までよりも、視覚情報をたくさん得ることができるようになった。視覚的に情報を得られるようになったので、授業に集中することができるようになった。本生徒も「今の状態が良いと思う」と言っていた。(図7)

(図6)



(図7)



③日記を書いて、様々な表現や助詞の使い方や間違ったところを減らすことができる。

→日記アプリを使って内容を作り、間違ったところを確認しよう



「絵日記 FREE」



「MetaMoji Note Lite」



「Google ドライブ」

絵日記 FREE アプリは上画面に写真を貼り、下画面に日記を書くことができるアプリで、本生徒は積極的に書く姿勢が見られた。当初は書いた内容をスクリーンショットして MetaMoji Note Lite アプリに添付して教師が間違ったところを赤字で書いて本生徒が確認する方法をとった。当初は本生徒が作成した内容を朝、iPhone を教師へ提出して、教師が修正してすぐ本生徒へ返すという手間がかかってしまったことを反省した。もっと確認しやすいように、本生徒が毎朝 iPhone を提出しなくて済むように別のアプリを探した。「Google ドライブ」を使って作成した内容をスクリーンショットして Google ドライブに共有をアップロードして教師が別の iPhone を確認して修正して日付ファイルをきちんと分けて確認することができるようになった。間違った内容をアナログ方法ではあるが、修正した PDF ファイルを印刷して本生徒に渡してノートに書く練習をした。

・対象生徒の事後の変化

日記アプリを使い始めた頃は、作文も関連するところがあって、助詞が抜けていたり、間違っていたことはもちろん、何をしていたかの文章だけを書くことが多かった。

どういう内容なのかを確認するために本生徒と話し合いをして、分かったことを赤字で書き直しをして、アナログな方法ではあるが、修正された日記を別のノートで書く習慣をつけた。最初は間違ったところに赤字で書く方法であったが、途中から時々ポイントとなるように文を書き加えた。(図8)

(図8) 5月の日記 → 8月の日記



「切られました」の主語は、自分さんと自分くんになるので、「お母さんが、バリカンでニコニコした顔で切られました。」という文は意味が伝わりません。

「お母さん」を主語にするときは、「母がバリカンを使ってニコニコしながら、切りました。」となります。

「僕」を主語にするならば、「(僕は) 母にバリカンで髪の毛を切られました。母は、ニコニコしながら僕たちの髪の毛を切っていました。」というようになります。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ① 作文の文章量が増え、様々な表現力もつき、助詞の使い方を理解することができたのではないか。
- ② 手話ができない人とコミュニケーションをとる時、様々なアプリを使ってコミュニケーションをとろうとする姿勢が身につけはじめたのではないか。

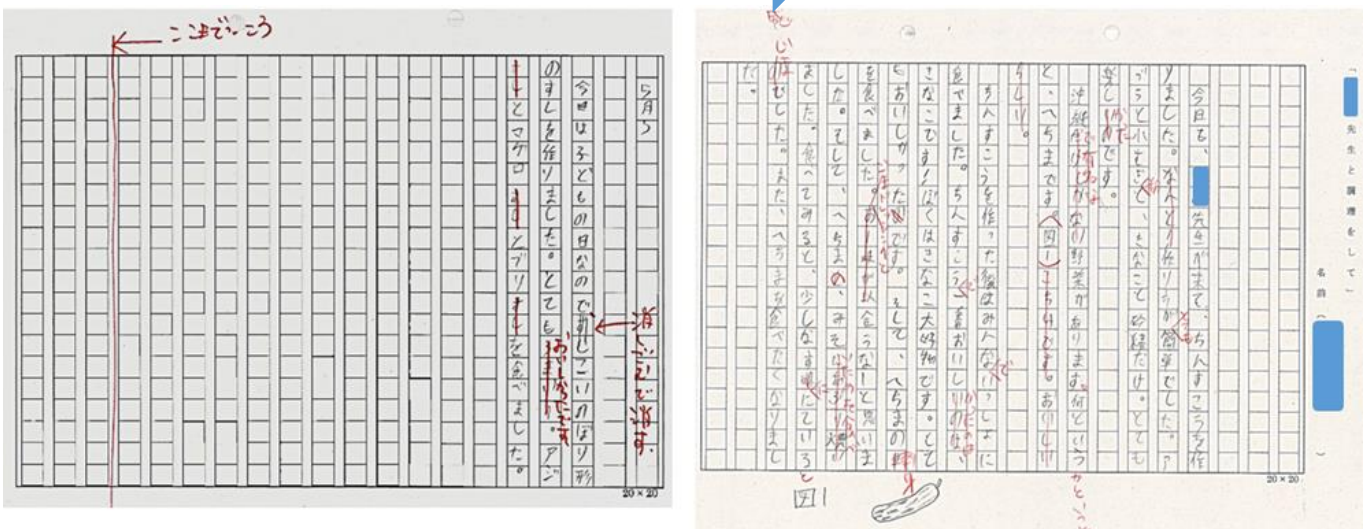
・エビデンス(具体的数値など)

① について

5月頃の作文では、自分の力だけで書く時は、自分がしたことのみのもとても短い内容だったので、教師と話してその状況を補足説明させることが多かった。

先ほどの日記アプリや日々の作文の指導を繰り返していく内に、10月を迎える頃には自分の力だけで、「したこと」だけでなく「思ったこと」なども含めて原稿用紙の半分以上を書くことができるようになった。(図9)

(図9) 5月頃の作文 → 10月の作文

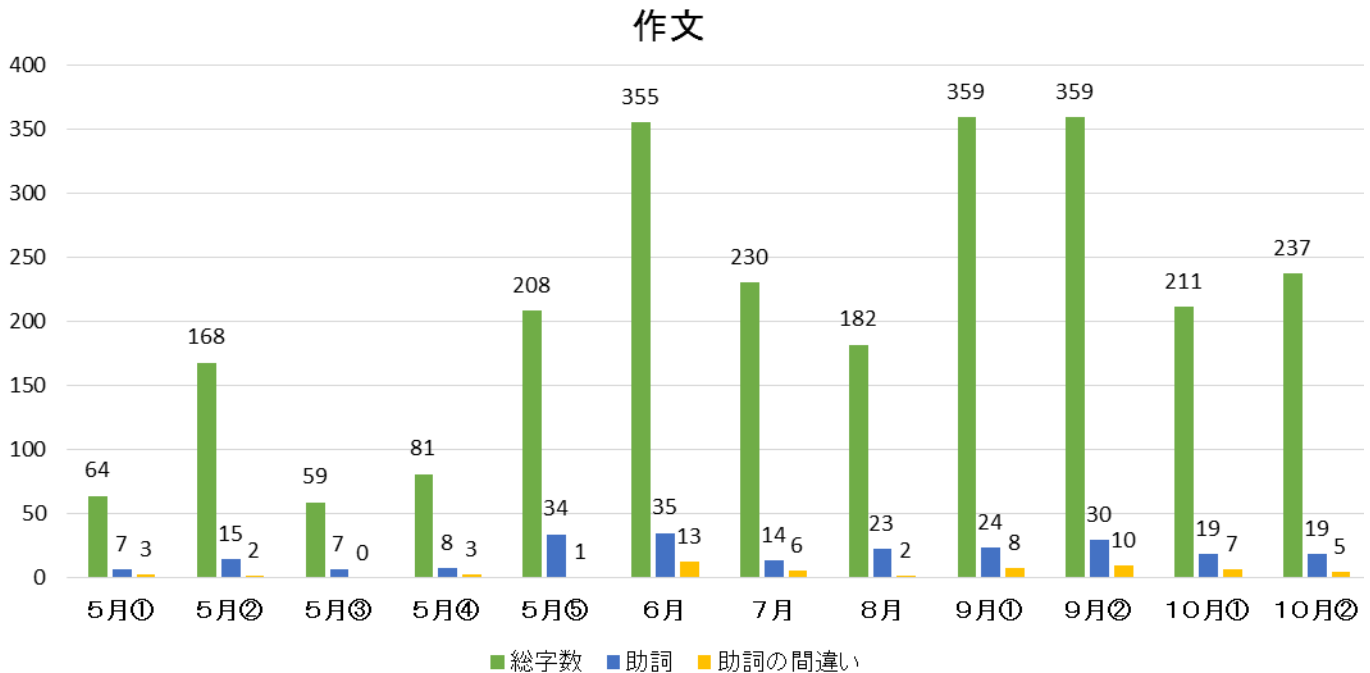


日本語の読み書き能力を向上させるために、毎日日記を書いて提出させた。最初は出来事や自分がしたことのみが

書かれ、内容が乏しかった。教師が「それはどんな様子だったの？もっと詳しく様子を教えて。」「その時、あなたはどんな気持ちだったの？」「他にどんなことを考えたの？」など質問し、本生徒が手話で応えたことを文章化し、内容を膨らませたものを本生徒は毎日、もう一度別のノートに書き写すことを習慣とした。その効果もあり、本生徒は徐々に作文を書くことも上手になり、出来事や自分がした事実のみを書くのではなく、気づいたことや思ったことも含めて、原稿用紙の半分以上を書くことができるようになった。

文章量は増えてきたが、やはり所々に助詞の間違いや助詞の書き漏れはあった。決まったパターンの文章の場合は間違いが少なくなった。(図10)

(図10)



②について

手話ができない教師の授業を受ける時、自分から iPhone と AppleTV を接続して、UD トークを開いてから授業を受けることが多くなった。UD トークの文章の内容が分からない時、自分から教師へ質問することも増えてきている。

授業の中の一つである「災害に遭った時、どうする？」の取り組みの中で、聴者とコミュニケーションをとる時、「iPhone の中にある筆談アプリを使って、コミュニケーションする」という発表ができていた。

・その他エピソード(画像などを含めて)

総合的な学習の時間で、中学3年生と一緒に修学旅行についての学習をした。その時、本生徒は自分から AppleTV と繋いでいるモニターを置いてある机を皆のいる教室へ持って行き、iPhone を使って調べていた。調べていたところをモニターで他の生徒や教師へ見せて説明する姿があった。